

□ 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。なお、句読点・記号は字数に数えます。

それでは、ここで記憶の種類について考えてみましょう。記憶研究の世界的権威者であるカリフォルニア大学サンディエゴ校のスクワイア教授は、記憶をいくつかの種類に分類しています。

ふつう、私たちが記憶として理解しているのは、海馬を介在させた知識や出来事の記憶です。これらは「①宣言的記憶」、あるいは「②顕在記憶」と呼ばれます。

宣言的記憶は2つの種類に分類されます。「意味記憶」と「エピソード記憶」です。私たちが学生時代に学んだいわゆる「暗記物」と称せられる知識は、そのほとんどが意味記憶です。「自動車はガソリンで走る」とか、「フランスの首都はパリである」といったようなすべての人間に共通の事実は、意味記憶です。

エピソード記憶とは、「昨日家族で近くのレストランに行って夕食を食べた」とか、「彼女といっしょに映画『崖の上のポニョ』を観に行った」というような、自分の体験に関する記憶です。どうしてこのような分類になったかという点、この2種類の記憶のメカニズムが異なっているからです。

それに関して、カナダの記憶障害の患者の実例があります。彼は自分の自動車の写真を見ると、それが自分の自動車であることはナンなく認識できました。□ 「昨日この自動車で行きましたか？」とい

う質問には、まったく答えられなかったのです。つまり、彼は意味記憶に關しては正常だったのですが、エピソード記憶を保持する能力が失われてしまったのです。

思い出という記憶は、その人の成長によってどんどん増殖し、それがその人間の個性というものを形成していきます。つまりエピソード記憶は、その人間が死ぬまで休むことなく脳に刻み続けられていくのです。そして、その人間特有の記憶の糸によって織りあげられた、この宇宙に1つしかない「④体験という絨毯」をつくりだしています。

もちろん、意味記憶とエピソード記憶がメカニズムとしてどのように記憶されるのか、あるいは記憶されている脳の部位がどう違うのかなど、まだまだ解明されていないことも多いのです。

□ 「非宣言的記憶」、あるいは「⑤潜在記憶」と呼ばれているものですか。それは代表的なものが「運動技能反射」です。スポーツの技術や陶芸、⑥器演奏などのジュクレンの技術は、すべてこれに属します。

一般的に私たちが「⑦頭のよい人間」と⑧ティギしているのは、意味記憶がすぐれた人間のことを指しています。しかし、前にも述べたように、⑨園に⑩出場する高校球児やヴァイオリンの天才も、実はそれ以上に「頭のよい人間」なのです。

もう1つの非宣言的記憶の代表的なものが、「条件反射」です。道を歩いていて、ヘビが藪からでてきたとたんに反射的に「⑪キヤー」と声をだして飛び上がるのが、その⑫テンケイ例です。あの有名な「⑬パプロフの犬」の

実験以来、この研究は相当進んでいます。

進化の過程から見れば、まず人間は非宣言的記憶である条件反射や運動技能反射を手に入れたのです。次に、ほかの動物との差別化を図るために、宣言的記憶を身につけたといえます。

人間の進化の過程の中で、私たちは新しい「ケイタイ」の記憶をどんどん獲得してきました。しかし一方で、情報を詰め込むことだけが進化ではないということも、そろそろ私たちは悟らねばならない時代に差しかかっているのも事実なのです。

(児玉光雄『マンガでわかる記憶力の鍛え方』より)

*海馬を介在させた…「かいば」という名前の脳の一部分を通して処理された

された

*エピソード……ちよつとした興味のある話。

*メカニズム……物事のしくみ。

*増殖……ふえること。

*脳の部位……脳の中の位置。

*陶芸……やきもの。

*「パプロフの犬」の実験…犬にベルを鳴らしてエサを与えることをくり返すと、ベルをならしただけで反射的につばを出すということを確認した実験。

問八 —線⑤「それ以上に『頭のよい人間』について、次の問にそれぞれ答えなさい。

- (1) 「それ」とは何を指していますか。文中から十一字でぬき出しなさい。
- (2) 「それ以上に『頭のよい人間』」とはどのような人間ですか。文中のこ

とばを使って、十五字以内で答えなさい。

問九 本文の内容と合うものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 私たちが記憶と理解している顕在記憶こそが、将来の人間の進化に必要である。
 - イ 人間は進化の過程で、非宣言的記憶を必要とせず、宣言的記憶を獲得していった。
 - ウ 宣言的記憶だけでなく、潜在記憶にも目を向けるべき時代に差し
- かかっている。
- エ 次の進化のために、われわれはより新しいかたちの記憶を手に入れるべきだ。

問一 ~~~~~線 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ||線 A「の」と同じ働きのものを、||線アエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

問三 I II に入る最も適当なことを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア つまり イ それでは ウ ところが エ だから

問四 —線①「宣言的記憶」とありますが、人間が「宣言的記憶」を手に入れた理由を文中から十五字でぬき出しなさい。

問五 —線②「宣言的記憶」について、本文の内容と合うものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア「昨日友人と公園で遊んだ。」といった記憶は、エピソード記憶である。

イ「あしたサッカーの試合を見に行く。」といった記憶は、エピソード記憶である。

ウ「キャベツは野菜だ。」といった記憶は、意味記憶である。

エ「わたしは辛い物が好きだ。」といった記憶は、意味記憶である。

オ 天才的テニスプレーヤーの技術は、宣言的記憶である。

問六 —線③「この2種類の記憶のメカニズムが異なっている」ことを示す実例を、文中から四十四字で探し、その最初の五字をぬき出しなさい。

問七 —線④「この宇宙に『体験という絨毯』とは、何をたとえたものですか。文中から十字でぬき出しなさい。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。なお、句読点・記号は字数に数えます。

① 犬を飼ってほしいといったのはほくだった。

両親に連れられて、デパートのペットショップの柵の中の子犬たちを見

たときのことだった。柵の中をのぞきこむと、子犬たちは、かわいい鼻がつぶれるほど柵にお

しつけて、「ほくを飼って」「わたしを飼って」というように、

「ワン、ワン！」とほえていた。

「あつ、この犬かわいい。これを飼ってよ」

ほくは、そのうちの二匹を、ママにゆびさしていった。

「犬は散歩させないといけないのよ。すぐ、あたまがイタいて、学校

休むあんなにできる？ 毎日のことよ」

「できるよ」

ほくは、大きな声でいった。

ほくのことばがわかったわけではあるまいけれど、子ぐまのよう

なところとふとった黒い子犬は、ほくに鼻をおしつけるように「クン、クン」

とナっていた。

「よし、飼ってやろう」

と、パパがいったので、「うわあい」とほくはさげんだ。でもパパは、そ

のあと、「ああ、だが、血統書つきのもっとりつばな犬をな」

と、つけくわえると、ママも、

「あわてないで、パパにまかせなさい」

「そのかわり、学校へは、かならず行くんだぞ」といった。

血統書なんてどうでもいい、といたかっただけれど、それはパパに対しては、むだだと知っているほくは黙ってしまっただ。^②それはパパに對し

一月後、チームズはパパにつれられて、この久保家へやってきた。

パパは、もつとりつばな犬をといったが、1 チームズはみごとシエバードであった。

二歳になるチームズは、もうりつばな成犬であった。

チームズは、ユニウ品^cをあつかっているパパの取り引き先の、イギリス商会の重役リチャードさんが、わざわざ本国から送らせてきた犬であった。

「じゅうぶん、しつけはしてある。安心、だいじよぶね」

リチャードさんは、りゅうちょうな日本語で話した。

ママは、外国人の客が来ると和服を着る。この日はあじさい色の和服を着て、ビールを運んできたママは、卓上^{なごしょう}に広げてあるチームズの血統書を見て、

「りつばなものですわね」といってから、ほくを振りかえって、

「よかつたわね、茂^{しげ}さん」

と微笑^{ほほえ}んだ。

④「うん」と、小さくうなずいたものの、ほくはこのとき、いつかデパート

にでる。市内を流れる川にそって、五年前、市の公園整備課の手入れで、道路ばたに四季の花をうえ、^{*}あずま屋をたてたりしてきれいな遊歩道だった。

ほくが、はじめてチームズを散歩させたとき、向こうからシベリアンハスキーを連れた中年の女の人が、

「あらつ、りつばな犬ねえ。シエバードでしょう」

と声をかけた。

ほくは、ちいさな声で「そうです」と答えただけだった。

「ドッグショーで入賞したんですって？」

なあんだ、知っているんじゃないか。パパから聞いたんだらう。

チームズは、目をりんと張^{*}って顔をあげているが、シベリアンハスキーは、恐れ入って目をふせているみいだっただ。

「いくつくらいかしら？」

「さあ……」

「利口なんでしょう？」

「さあ……」

女の人は、まだ話したそうであったが、チームズはほくの顔を見て、もういいから行こうと、うながしているようであった。

しばらくいくと、あずま屋の前にさしかかった。ベンチのまわりには、

三、四人、犬を連れた散歩仲間らしい人たちがいた。どうやら、ここは、

こういう人たちのたまり場であるらしかった。そのうちのひとりが、

「ほうや、いいシエバードを飼ってるね。利口だらう」

のペットショップで見た黒い子犬を思い出していた。

チームズの血統書は、額におさめて応接間にかざられた。

パパは、取り引き関係の客や銀行員が、わが家にくると、2 血統書を指さして説明し、そのあと、庭に出てチームズを見せるようになった。

チームズは、日当たりのよい庭のすみの柵の中で飼われている。

3 その柵のすみに寝小屋^{ねこや}も置いてある。

シエバードは、強くて鼻がきくので、軍用犬や警察犬に適している。たしかにチームズは黒と灰色がかつたぶちの毛なみと、そのルックスはもろんのこと、利口であった。

チームズの散歩は、たいていはパパかママがするが、日曜日や休日ばかりの仕事となった。でも、夏休みになったので、ほくが散歩に連れだすことが多くなった。といつても、ほくが好んだことではない。チームズとは、^⑤はじめから、なんとなく相性が悪いみいだっただ。

チームズをはじめ散歩に連れだしたとき、チームズは、見送るパパを見て、すぐ歩きだそうとしなかった。

「はっ、はっ、は、は、は」

と、葉巻^{*}をくわえたまま、パパは笑って、

「チームズのやつ、茂では役不足、という顔をしてるぞ」

といった。

チームズの散歩のコースは決まっていた。

門を出て、広いバス通りを横切って、住宅街のあいだをゆくと、遊歩道

といつて、近づいてきた。

「そうみたいです」

と、ほくはいつたが、うれしくはなかった。^⑥

たしかにチームズは利口といえはいええると、ほくはこのあいだの、4 愉快^{ゆかい}でなかったことを思い出した。

パパとママは、ほくを有名私立中学に進学させようと塾^{じゆく}に入れた。だが、ほくの成績はいまいちである。

「どうして成績があがらないのでしょうか」

ママに聞かれた家庭教師の中村先生は、

「勉強がたりないんです。宿題もわすれることが多いんです」

このひとことが、ママからパパに伝わったらしい。^⑦

土曜日、ほくはまた学校をやすんだ。クラスの男子は、午後サッカーをやることになっていた。どうせほくは、だれにもさそってもらえない。さびしい思いをするのはいやだからやすんだ。

その日曜日、ほくは庭にいるパパに呼ばれた。

パパはホースで水をまいていた。まだセイカ^{せいかに}には早いの、三十度ち

かい午後であった。

「茂、足もとを見なさい」

パパは、植木に水をかけながら、あごで地面をさした。

「どうしたの？」

「この暑さなのに蟻^{あま}はせっせとはたらいている」

なるほど、夏の日をあび、黒く光りながら、無数の蟻がせわしく動きま

わっている。

それで、どうなの？ とパパの顔を見あげると、

「きのうも学校やすんだそうだな」

ぼくは小さくうなずくほかなかった。パパはそのあと、なにもいわなかった。

このとき、柵の中でチームズが、ぼくたち親子をみて、かるく「ワーンー」とほえた。

「冷たい水ととりかえてやろう」

と、パパは、ぼくを振りかえつた。

ぼくは、小屋の中の容器の水を捨て、新しい水にとりかえてやった。

すると、チームズは軽くしっぽを振ってみせるものの、その目は、パパに向けられていた。ぼくが水をあげたのに、それは父親に命令されたからなのだと、チームズは知っているのだろうか。それとも、父親に、働いている蟻を見せつけられ、頭をたれて叱られていたぼくに気づいたのだろうか。飼い犬は、その家族のひとりひとりの地位を、すばやく読みとって、それに応じた反応をするというから、ぼくをばかにしているのかもしれないと思った。

夏休みになったので、ぼくは毎日、チームズを散歩に連れていかなければならなくなった。

ぼくは、チームズの散歩に、れいの遊歩道に行くのはやめにした。

犬じまんのおじさん、おばさんたちに会いたくはなかったからだ。

反対の方角をゆくと、私鉄の踏切がある。そこを渡って、住宅街をいく

問一 線a～eのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 1 4 に入る最も適当なことを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 決して イ さらに ウ たしかに
- エ かならず オ たぶん カ あまり

問三 線I「たしかに」・II「まだ」はどこにかかりますか。それぞれ記号で答えなさい。

I たしかに ア チームズは イ 黒と灰色がかった ウ ぶちの毛なみと、
 エ そのルックスは オ もちろんのこと、利口であった。

II ア また イ セイカには ウ 早いのに、エ 三十度ちかい 午後であった。

問四 文中には次の一文がぬけています。どの文の後に入れるのが適当ですか。その文の最初の五字をぬき出しなさい。

つまり、このおばさんは、話がしたいだけなんだと思った。

つか折れ曲がると、多摩川の土手へ出る。堤防の上は、自動車をはしっている。

ぼくは、堤防にあがって、ひそかにこれはいいと思った。あまり犬の散歩をする人は見かけない。河原を見下ろすと、ぼくと同じくらいの男の子が、ひとり犬を遊ばせていたが、棒を投げては犬にくわえさせるといふ子どもらしいことをしている。

堤防の道を五分ほどゆくと、堤防の下に小さな寺があった。せまいケイダイにブランコとすべり台が置いてある。

おりてゆくと、「妙香寺遊園地」と、たいそうな名がついているが、遊んでいる子はだれもいない。

ケイダイのすみに、寺にあわないうりっぱな楠の大木が、涼しげにみどりの葉を空いっぱい茂らせていた。

これはいいと、ぼくはつぶやいて、チームズを楠につないでポケットから文庫本『坊っちゃん』をとりだし、雨ざらしの小さなベンチに腰をおろした。

いくらチームズが利口でも、口をきけない以上は、いつつけられる心配はない。とはいっても、かすかな良心のイタミを感じないわけではなかった。でも、パパ、ママにかくれてる、夏の木かげの読書は楽しかった。

(浜野卓也『さよなら友だち』所収「ぼくとクロ」より)

* りゅうちょう …… ことばをすらすらと話すようす。
 * 葉巻 …… タバコの種類。
 * あずま屋 …… 公園などに休憩などのために置かれた小さな建物。
 * りんと …… きりりと引きしまったようす。

問五 線①「犬を飼ってほしい」と主人公が言ったのはなぜですか。

- 最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
- ア 黒く小さな子犬があまりにもかわいかったから。
- イ 自分を必要とする存在がほしかったから。
- ウ 血統書付きの立派な犬がほしかったから。
- エ 学校に行くきっかけを作ったから。

問六 線②「それ」はどのようなことを指していますか。文中のことはを使って、二十字以内で答えなさい。

問七 線③「パパに対しては、むだだ」とありますが、どうしてそう思うのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア パパは見事な犬が好きで、小さな犬はきらいだから。
- イ パパは一度言い出したら後に引けない性格だから。
- ウ パパはいつも自分のことばかりで僕には関心がないから。
- エ パパはまず最初に肩書きを重んじる性質だから。

問八 線④「うん」にこめられた気持ちとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

問九 線⑤「はじめから、なんとなく相性が悪いみたいだった」とあるが、なぜそう感じたのですか。文中の言葉を使って、四十五字以内で答えなさい。

問十 ー線⑥「うれしくはなかった」とありますが、なぜそう思ったのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア テームズがどんなに利口だろうとかわいげがないから。
 - イ 何人もテームズをほめるので、おもしろくなかったから。
 - ウ テームズから自分がばかにされると思っているから。
 - エ 本当はベットショップの黒い犬を飼いたいと思っているから。
- 問十一 ー線⑦「ママからパパに伝わったらしい」と考える根拠(もと)となる理由)は、パパのどんな会話からですか。それを探して、最初の五字をぬき出しなさい。

問十二 ー線⑧「父親に、働いている蟻を見せつけられ」とありますが、ここで父親の伝えたい内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 仲間とともに働こう。
- イ 暑さに負けるな。
- ウ 大小には関係ない。
- エ どんな時でも努力しよう。

問十三 ー線⑨「これはいい」とありますが、そう思った理由を文中より三十文字以内で探し、その最初の五字をぬき出しなさい。

問十四 ー線⑩「これはいい」とありますが、そう思った理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 暑さをしのげるから。
- イ 少し疲れていたから。
- ウ 本が読めたかったから。
- エ 散歩をさばれるから。

問十五 本文内容と合わないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ぼくが望んでいるのは、自分をわかってくれる仲間である。
- イ ぼくは気が進まないとなまけてしまう性質がある。
- ウ ママはいつでもぼくのことを尊重する、よき理解者である。
- エ ママはいつでも姿形を大切にし、犬に対しても同様である。
- オ パパとぼくは、考え方のちがいであまりしっくりっていない。

